

演習問題 1.8 線型空間 V の部分空間 W が V の演算に関して線型空間になることを示せ。

線型空間になるためには定義 1.4 の 8 つの性質を持てばよかった。(1),(2) 及び (5)-(8) は V という全体集合上で成立しているのだから、その部分集合である W 上でも成立している。よって実際に示さなければいけないのは (3),(4) である。

(3) $0 \in W$ を示せばよい。 W は空集合でないのだから W はあるベクトル w_0 を含む。 $0 = 0w_0$ であるが、部分空間の性質より $0 \in W$ となる。

(4) 任意のベクトル $w \in W$ に対し $-w \in W$ を示せばよい。ここでは $-w = (-1)w$ はすでに示されているものとする(これを仮定しない場合は、この事実の証明も必要)。このとき部分空間の性質より $(-1)w \in W$ となるので $-w \in W$ となる。

演習問題 1.9 前節で残していた問題であるが、 T を V から U への線型写像とすると $\text{Im}(T) < U$, $\text{Ker}(T) < V$ を示せ。

問題を証明する前に次の事実を示しておく。『 T を V から U への線型写像とすると $T(0) = 0$ である。』 $0 + 0 = 0$ なので $T(0) = T(0 + 0) = T(0) + T(0)$ となる。両辺から $T(0)$ を引くと $T(0) - T(0) = T(0)$ 即ち $0 = T(0)$ を得る。

$T(0) = 0$ より $0 \in \text{Ker}(T)$ が分かり $\text{Ker}(T) \neq \emptyset$ である。 $v_1, v_2 \in \text{Ker}(T)$ とすると $T(v_1) = 0, T(v_2) = 0$ が成立している。このとき $T(v_1 + v_2) = T(v_1) + T(v_2) = 0 + 0 = 0$ より $v_1 + v_2 \in \text{Ker}(T)$ となる。また任意のベクトル $v \in \text{Ker}(T)$ と任意のスカラー $\alpha \in K$ に対し $T(\alpha v) = \alpha T(v) = \alpha 0 = 0$ となるので $\alpha v \in \text{Ker}(T)$ となり $\text{Ker}(T)$ が V の部分空間である事が分かる。

$0 = T(0)$ より $0 \in \text{Im}(T)$ となり $\text{Im}(T) \neq \emptyset$ となる。 $u_1, u_2 \in \text{Im}(T)$ に対しベクトル $v_1, v_2 \in V$ で $u_1 = T(v_1), u_2 = T(v_2)$ となるものが存在する。このとき $T(v_1 + v_2) = T(v_1) + T(v_2) = u_1 + u_2$ となるので $u_1 + u_2 \in \text{Im}(T)$ となる。また任意のベクトル $u \in \text{Im}(T)$ と任意のスカラー $\alpha \in K$ に対し、 $v \in V$ で $u = T(v)$ となるものが存在するので、 $T(\alpha v) = \alpha T(v) = \alpha u$ となるので $\alpha u \in \text{Im}(T)$ となる。よって $\text{Im}(T)$ は U の部分空間である。

演習問題 1.10 例 1.11 を証明せよ。

定義 1.10 の 3 条件をチェックすればよい。ここでは (5) のみ示しておく。恒等的に 0 となる関数を $z = z(x)$ とする。 $z' = z$ なので任意の自然数 n に対し $z^{(n)} = z$ である。よって z は微分方程式 $L : y^{(n)} + a_{n-1}y^{(n-1)} + \cdots + a_1y' + a_0y = 0$ の解関数になっている。 $z \in \text{De}(L)$ なので $\text{De}(L) \neq \emptyset$ となる。 $y_1, y_2 \in \text{De}(L)$ とする。 $(y_1 + y_2)' = y_1' + y_2'$ なので任意の自然数 n に対し $(y_1 + y_2)^{(n)} = y_1^{(n)} + y_2^{(n)}$ が成立する。このとき $(y_1 + y_2)^{(n)} + a_{n-1}(y_1 + y_2)^{(n-1)} + \cdots + a_1(y_1 + y_2)' + a_0(y_1 + y_2) = y_1^{(n)} + y_2^{(n)} + a_{n-1}y_1^{(n-1)} + a_{n-1}y_2^{(n-1)} + \cdots + a_1y_1' + a_1y_2' + a_0y_1 + a_0y_2 = y_1^{(n)} + a_{n-1}y_1^{(n-1)} + \cdots + a_1y_1' + a_0y_1 + y_2^{(n)} + a_{n-1}y_2^{(n-1)} + \cdots + a_1y_2' + a_0y_2 = 0 + 0 = 0$ となり $y_1 + y_2 \in \text{De}(L)$ となる。

$y \in \text{De}(L)$ と任意の実数 $\alpha \in \mathbf{R}$ に対し $(\alpha y)' = \alpha y'$ なので任意の自然数 n に対し $(\alpha y)^{(n)} = \alpha y^{(n)}$ が成立する。このとき $(\alpha y)^{(n)} + a_{n-1}(\alpha y)^{(n-1)} + \cdots + a_1(\alpha y)' + a_0(\alpha y) = \alpha y^{(n)} + a_{n-1}y^{(n-1)} + \cdots + a_1y' + a_0y = \alpha(y^{(n)} + a_{n-1}y^{(n-1)} + \cdots + a_1y' + a_0y) = \alpha \cdot 0 = 0$ となり $\alpha y \in \text{De}(L)$ が成立する。以上により $\text{De}(L)$ は $C^\infty(\mathbf{R}; \mathbf{R})$ の部分空間になる。

演習問題 1.11 $\langle S \rangle$ は $\langle S \rangle = \{x \in V \mid \exists v_1, \dots, v_n \in S, \exists c_1, \dots, c_n \in \mathbf{K}, x = c_1v_1 + \cdots + c_nv_n\}$ と書き表される。

$W = \{x \in V \mid \exists v_1, \dots, v_n \in S, \exists c_1, \dots, c_n \in \mathbf{K}, x = c_1v_1 + \cdots + c_nv_n\}$ とするとき, $W = \langle S \rangle$ を示す。そのために (1) W は S を含む部分空間である (2) V の任意の部分空間 U で U が S を含んでいれば $W \subseteq U$ を示せばよい (この理由の分からないものは $\langle S \rangle$ の定義をもう一度よく見る事)。

(1) $0 \in W$ なので $W \neq \emptyset$ である。 x_1, x_2 を W の任意のベクトルとする。このとき S のベクトル $v_1, \dots, v_n, u_1, \dots, u_m$ とスカラー $c_1, \dots, c_n, d_1, \dots, d_m$ が存在して $x_1 = c_1v_1 + \cdots + c_nv_n, x_2 = d_1u_1 + \cdots + d_mu_m$ となっている。このとき $x_1 + x_2 = c_1v_1 + \cdots + c_nv_n + d_1u_1 + \cdots + d_mu_m$ と書けるので $x_1 + x_2 \in W$ となる。

任意のベクトル $x \in W$ と任意のスカラー $\alpha \in \mathbf{K}$ に対し S のベクトル v_1, \dots, v_n とスカラー c_1, \dots, c_n が存在して $x = c_1v_1 + \cdots + c_nv_n$ となっている。このとき $\alpha x = (\alpha c_1)v_1 + \cdots + (\alpha c_n)v_n$ と書けるので $\alpha x \in W$ となる。以上により W は部分空間である。 W が S を含むのは明らか (何故か? 分からないものは理由を考えよ) なので, (1) は証明された。

(2) x を $\langle S \rangle$ の任意のベクトルとする。このとき S のベクトル v_1, \dots, v_n とスカラー c_1, \dots, c_n が存在して $x = c_1v_1 + \cdots + c_nv_n$ となっている。このとき $v_1, \dots, v_n \in U$ となっている。また U は部分空間であるから $c_1v_1, \dots, c_nv_n \in U$ となっている。 U は部分空間であるから $c_1v_1 + c_2v_2 \in U$ となる。これを用いいると $(c_1v_1 + c_2v_2) + c_3v_3 \in U$ となる。以下同様にして (厳密には数学的帰納法), $c_1v_1 + \cdots + c_nv_n \in U$ が得られ, $x \in U$ となる。以上により (2) は示された。

演習問題 1.12 V の部分空間 U_1, U_2 に対し $U_1 + U_2$ 及び $U_1 \cap U_2$ が V の部分空間になる事を示せ。

部分空間の定義にしたがってチェックすればできるので省略。

演習問題 1.13 V の部分空間 U_1, U_2, U_3 が $U_1 \cap U_2 = \{0\}$ かつ $(U_1 \oplus U_2) \cap U_3 = \{0\}$ を満たすとき, $U_2 \cap U_3 = \{0\}$ かつ $U_1 \cap (U_2 \oplus U_3) = \{0\}$ が成立し, $(U_1 \oplus U_2) \oplus U_3 = U_1 \oplus (U_2 \oplus U_3)$ となる。よってこれを $U_1 \oplus U_2 \oplus U_3$ と書く。

集合として $(U_1 + U_2) + U_3 = U_1 + (U_2 + U_3)$ は明らかなので, 直和の条件のみをチェックする。最初に任意の部分空間 U に対し $\{0\} \subseteq U$ が成立している事を確認しておく。よって $\{0\} \subseteq U_2 \cap U_3$ が成立する。また $U_2 \subseteq U_1 \oplus U_2$ なので $U_2 \cap U_3 \subseteq (U_1 \oplus U_2) \cap U_3 = \{0\}$ となり $U_2 \cap U_3 = \{0\}$ となる。

$\{0\} \subseteq U_1 \cap (U_2 \oplus U_3)$ は前と同様に分かるので, 逆の包含関係を示す。 $U_1 \cap (U_2 \oplus U_3)$ の任意のベクトル x は $x \in U_1$ かつ $x \in U_2 \oplus U_3$ となっている。 $x_2 \in U_2$ 及び $x_3 \in U_3$ が存在し $x = x_2 + x_3$ となる。このとき $x_3 = x + (-1)x_2$ となり $x + (-1)x_2 \in U_1 \oplus U_2$ が分かる。 $(U_1 \oplus U_2) \cap U_3 = \{0\}$

より $x_3 = x + (-1)x_2 = 0$ となる。 $x = x_2$ は $U_1 \cap U_2$ の元なので $x = 0$ となり $x \in \{0\}$ が示された。

演習問題 1.14 Φ_S が同型写像である事を証明せよ。

最初に線型写像になる事を示す。 $x, y \in V$ が $x = x_1v_1 + \cdots + x_nv_n, y = y_1v_1 + \cdots + y_nv_n$ と表したとき $\Phi_S(x) = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}, \Phi_S(y) = \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix}$ となっている。 $x+y = (x_1+y_1)v_1 + \cdots + (x_n+y_n)v_n$

となるので $\Phi_S(x+y) = \begin{pmatrix} x_1+y_1 \\ \vdots \\ x_n+y_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix} = \Phi_S(x) + \Phi_S(y)$ が成立する。

$\alpha \in K$ に対し $\alpha x = (\alpha x_1)v_1 + \cdots + (\alpha x_n)v_n$ となるので, $\Phi_S(\alpha x) = \begin{pmatrix} \alpha x_1 \\ \vdots \\ \alpha x_n \end{pmatrix} = \alpha \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} =$

$\alpha \Phi_S(x)$ が成立する。以上により Φ_S が線型写像である事が分かる。

Φ_S が一対一である事を示すには $\text{Ker}(\Phi_S) = \{0\}$ を示せばよい。 x を $\text{Ker}(\Phi_S)$ の任意の元とする。 $\Phi_S(x) = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}$ より $x = 0v_1 + \cdots + 0v_n = 0$ となる。 $\text{Ker}(\Phi_S) \subseteq \{0\}$ が成立する。逆の包

含関係は明らかなので Φ_S は一対一である。

K^n の任意のベクトル $\begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$ に対し $x = x_1v_1 + \cdots + x_nv_n$ とおくと $x \in V$ であり, $\Phi_S(x) =$

$\begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$ となる。よって Φ_S は上への写像である。